

Title	ユートピアの終焉? : ユートピアの再定義に向けて
Sub Title	The end of Utopia? towards the redefinition of Utopia
Author	菊池, 理夫(Kikuchi, Masao)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1994
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.67, No.12 (1994. 12) ,p.181- 202
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	内山秀夫教授退職記念号
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19941228-0181">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19941228-0181</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## ユートピアの終焉？

——ユートピアの再定義に向けて——

菊池理夫

ユートピアについて語ることは今日の流行ではないだろう。今日の流行はむしろ神話である。

……三木清「ユートピア論」昭和五年

1

現在も流行ではないようだが、ユートピアについては依然として語られている。実際に、様々なものがユートピアと呼ばれている。しかし、ユートピアという言葉は、自明のように使われながら、実は様々な意味を込められて語られていることに、あまり気づいていないように思われる。

例えば、ユートピアという言葉がタイトルやサブタイトルに使われたエッセイ、対談や著作のなかで、ユートピアに関する定義がないのはまだしも、本文にはユートピアという言葉が一切もしくはほとんど使われていないものもある。おそらく、一般的にユートピアという言葉には共通理解があると考えられているのであろう。

もう少し具体的にいえば、最近の傾向として、ソ連のような共産主義体制をユートピアと同一視し、その解体は「ユ

ートピアの死」を意味し、その終焉を当然のものとする論調がある。また、現在の高度情報社会や高度消費社会を(その表象としての万博や遊園地も) ユートピアとして批判的に考察する人もいる。

しかし、ユートピアという言葉が良い意味で用いる場合の方が、一般的には多いはずである。例えば、不動産業では自らの物件をユートピアにたとえる広告がある。ソ連がユートピアとして批判されるのも、かつてソ連を良い意味でのユートピアと考えた人がいたからであり、今でも現実の特定の時代や特定の地域をそう考える人がいるであろう。さらに、いずれも、良い意味にしろ、悪い意味にしろ、実現されたもの、あるいは実現されるものとして、ユートピアを語っているのに対して、実現されない夢想のようなものや、ときには非現実的な逃避として語られることも多いのではないだろうか。

このように異なる意味がありながらも、同じユートピアという言葉が使われるのは、私の考えでは、何よりも様々な理想社会ないしは理想社会論とユートピアとの相違が理解されていないからである。とりわけ、ユートピア的伝統が希薄な社会に生きるわれわれとしては、ユートピアを自明のものとはみなすことはできないと考えている。

ここでは、現在のユートピア批判も十分ふまえながら、ユートピアの様々な意味を整理し、明確化することによって、ユートピアの新たな意義を探っていきたい。なお、本稿は、私がすでに試行した、ルネサンス期のユートピアの定義やユートピアの現代的意義を発展させたものであるが、ユートピアの一般理論を確立させるためには、さらに展開すべき課題も山積し、多くは問題提起として終わらざるをえないと思う。

## 2

一般的用法と同様に、専門的ユートピア研究者の間でも、ユートピアに関する共通理解はない。このことは一つに

は、それが様々に異なる研究領域で扱われていることに原因があると思われる。文学、哲学、歴史学、教育学、心理学、政治学、法学、社会学、経済学、生物学、建築学、都市工学など様々な領域で実際に研究対象となり、ある研究者によれば、「図書館司書が他の所に分類できないほとんどすべてのもの」も、ユートピア文献に含まれる。<sup>(1)</sup>

そのために、どのような文献をユートピア作品と呼ぶかについても、当然それぞれの専門領域で異なるとともに、同じ専門の間でも一致をみない。確かに、トマス・モアの『ユートピア』（一五二六年）やフランシス・ベーコンの『ニュー・アトランティス』（一六二四年頃執筆）のように、ユートピア作品とみなすことに異論はないものもある。しかし、例えば、イギリス革命期のジェラルド・ウィンスタントリの『自由の法の綱領』（一六五二年）やジェームズ・ハリントンの『オセアナ共和国』（一六五六年）は、ユートピア作品として語られることが多いが、そうとは考えない人もいる。逆に、ホップズの『リヴァイアサン』やルソーの『社会契約論』をユートピア作品とみなす人もいる。

もちろん、このような文献だけがユートピアと考えられているのではない。都市計画や共同体運動、ときにはソ連やアメリカ合衆国のように一国全体がユートピアとも呼ばれている。しかし、例えば、共同体運動でも、世俗的なものと宗教的なもの、都市的なものと農村的なものなどと、かなり性格を異にし、またすべてをユートピアとみなすことができかどうかとも、後でいうように議論の余地がある。さらに、ユートピア作品とユートピア実践とが、どういう関連をもっているかについても、普通いわれるほどははっきりしていない。実際に、最近の傾向としては、アメリカでは「ユートピア共同体」よりも、より中立的な言葉として、「意図的社会(Intentional Societies)」の方が実践者の間で使われる傾向があるという。<sup>(2)</sup>

さて、このように様々なものがユートピアと呼ばれているために、何らかの共通理解や定義が必要になると思われるが、それほど必要ないと考える研究者もいる。九〇〇頁にも達しようとする大部のユートピア通史『西洋世界におけるユートピア思想』（一九七九年）を出版した二人のマニニエルによれば、「ユートピア的性向の存在を仮定している

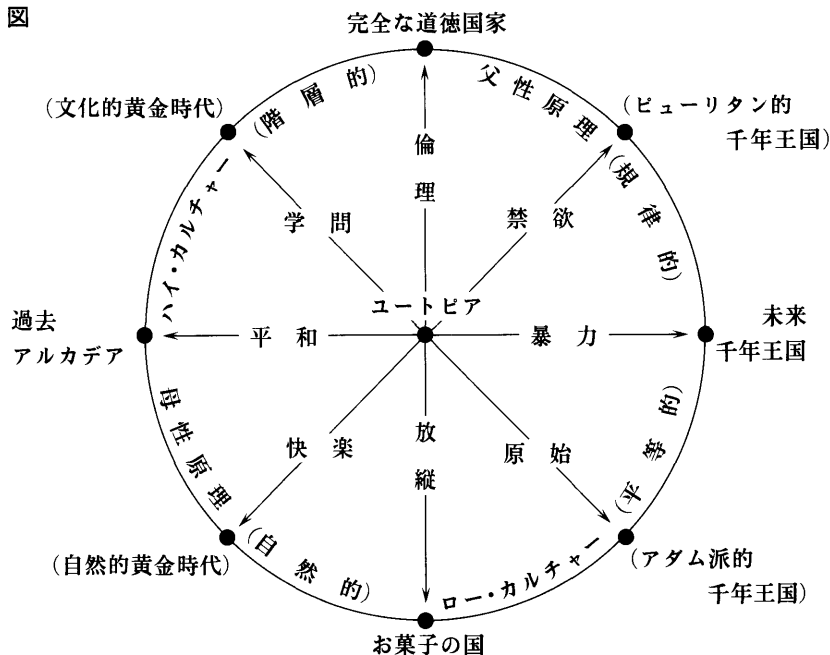
われわれの研究の方針では、ユートピアには複数の意味が必要である<sup>(3)</sup>。しかし、特にその意味を明らかにせず、とりわけ、ホップズの『リヴァイアサン』をユートピア作品と呼ぶことを弁明して、「本書では、主権者の絶対命令によって、われわれは著述家をユートピアアンと宣言している」と述べている<sup>(4)</sup>。

この著作を批判的に書評したライマン・T・サージャントは、何らかの定義の必要性をいう。「学問領域では深刻な対立があることは恐らく健康なことであろう。そうだとしたら、実にユートピア研究は健康である。とはいえ、用語に関する何らかの基本的一致が必要とされるように思われる<sup>(5)</sup>」。ところが、同じくマニユエルの著作を書評したプロニスラフ・パチコによれば、厳格な定義をしなかったことがその本のむしろ長所である。むしろ問題なのは、「彼ら『社会哲学者や社会学者』によるあまりに多くの定義があり、そのため彼『ユートピア史家』は定義の欠如よりも、定義の過剰に当惑している」ことである<sup>(6)</sup>。

私も新たに定義を加えることで、混乱に拍車をかけることになるかもしれない。確かに、社会科学一般、とりわけ政治学において、多くの用語は「本質的に論争概念」であり、とくにユートピアという言葉は、良い意味でも、悪い意味でも両方に使われる言葉であるために、誰をも満足させる厳格な定義を得ることは不可能であろう。しかし、少なくとも「主権者の絶対命令」だけで済ますことはできないはずである。

すでに、私は一〇のルネサンス・ユートピア作品を通して、その定義を試行したことがある。「現実の社会に対する批判的意識から、それよりもすぐれていると思われ、かつ現実には存在しない諸制度を有する社会を、形式的には虚構的空間に設定して、全体的かつ具体的な像として提出する思考実験である<sup>(8)</sup>」。詳しい説明はここでは省略したいが、この定義で強調しなかったことはまず、ユートピアと「理想社会」一般とは異なることである。とりわけ西洋における他の四つの理想社会の類型、「完全な道德国家」、「アルカデア」、「お菓子の国」、「千年王国」よりも、ユートピアが「より制度的であり」、「より現実的である」ことである<sup>(9)</sup>（図も参照）。

図



まず「完全な道徳国家」は、基本的には既存の制度や階層を前提として、そのなかで、道徳的に完全な君主や為政者による統治を望ましいと考えるものである。古代から続き、中世やルネサンス期にも数多く書かれた「君主鏡」の伝統がこれにあたる。これに対して、ユートピアは、何らかの新しい制度を提出し、しかもその制度や強制力によって人々を秩序へと導く点で、完全な人間性、「善性」に期待しているのではない。

牧歌的であるが、実際は貴族的な「アルカディア」や欲望が充足される民衆的な「お菓子の国」は、いずれも自然に従って生きることが正しいとされ、実際に人々は平和のもとで暮らしているが、人為的な制度への関心はほとんどない。このような理想社会の伝統は、桃源郷のように東洋や日本にもあり、さらに世界中に流布していると思われる。私は一括して「自然の楽園」と呼びたい。これに対してユートピアは、厳しい規律のもと人々が労働する社会であり、時には戦争も行う社会である。

最後に、「千年王国」は、近い将来に暴力的にでも、この地上に虐げられた「聖徒」が支配する王国の実現を語るものであるが、ここでも制度的関心はほとんどなく、基本的にはその実現は「神意」に委ねられている。これに対してユートピアは基本的には人間が理性的に社会を構築していくものである。ただ、人々を行動へと駆り立てる力は「千年王国」の方が強い。なお、カール・マンハイムの『イデオロギーとユートピア』でいう「ユートピア」とは、資料の点からも、内容の点からも、多くは「千年王国」をさしている。そのため、「秩序を破壊する働きをもつものだけに限定する」という彼のユートピアの規定は再考が必要である<sup>(10)</sup>。

このように、ユートピアは他の類型から区別できるが、同時にそれらの要素が全くないわけでもない。個々の作品では、そのいずれかに限りなく近いものもあり、実際の境界を画定するのは困難な場合もある。しかし、私の考えでは『ユートピア』はちょうどそれらの類型から遠距離の中心に位置する作品であり、多かれ少なかれそれを意識したものをユートピア作品と呼ぶことができる。とくに、この点で注意したいのは、ユートピア作品は、たんに制度だけを記述しているのではなく、架空の社会のイメージを「全体的かつ具体的」に描いていることであり、それだけ人々の想像力に強く訴えることである。実際にユートピア作品の著者自身によってでなくても、しばしばその実現化が図られている。

ユートピアが危険だとしたら、それは逃避的だからではなく、むしろ現実的だからである。ルイス・マンフォードは「逃避のユートピア」と「再建のユートピア」とを区別するが、<sup>(11)</sup>逃避的なものはむしろ「アルカディア」や「お菓子の国」などの「自然の楽園」であると考えるべきである。また、ジャン・セルヴィエは、<sup>(12)</sup>父性原理に基づく千年王国から区別して、ユートピアを「母の胎内の平安」を求める逃避的なものとしている。しかし、ユートピアがもつばら逃避的なものにすぎないのであれば、なぜユートピアの実現が図られ、その実現を恐れる人々も多いのであろうか。次に強調したかったことは、ユートピアが「虚構空間」における思考実験である点である。この点ではまず、この

時期のユートピアは、形式的に現実から遠い空間に置かれ、それがいかに現実社会で実現されるかに関しては、ほとんど述べられていないことを指摘できる。ただ、そのことがユートピアの欠点といわれてきたが、むしろ逆である。つまり、ルネサンス・ユートピアは、その実現を直接に図ろうとしているのではなく、その虚構性を意識した「思考実験」であることに、むしろその意義がある。

この点では、「ユートピア」という言葉のもつ意味に、私は注目してきた。<sup>(13)</sup>つまり、モアがギリシャ語から造語した *ou-topos* とは、「非―場所」、つまり「どこにもない場所」という意味である。ユートピアとは現実的であっても、存在しえないものである。ところが、このことを理解し、指摘する論者であっても、その多くが依然として現実に存在するものをユートピアと呼ぶのはなぜなのだろうか。ユートピアの虚構性こそ、それを考えるさいに、つねに意識すべきものである。われわれが特定の時代や特定の社会を理想的とみなすことはかまわないが、ユートピアとみなすことは不可能である。

現実的でありながら、虚構的な空間、このような逆説的性格を持つ点にユートピアの最大の特徴がある。「ユートピア」という言葉は、*eutopos*、つまり「良い―場所」の掛け言葉にもなっている。「どこにもない場所」だが「良い場所」を具体的に考えることは逃避的なことではない。それは現実を否定し、現実との別の可能性を考えることによって、新しい可能性に人々を導く効果がある。ただ、それはあくまでも完全に実現できるものではない。しかし、終末論や千年王国思想と結びついたユートピアは、近い未来において、その実現を確信あるいは期待する傾向がある。

さて、この私のルネサンス・ユートピアの定義は、あくまで『ユートピア』から『ニュー・アトランティス』に限定し、また実践としてのユートピアは直接的には考慮に入れていない。この定義はどこまで一般化できるかを考えていきたい。

ユートピアの定義を求めると、様々な難問が存在するが、まず広い意味での定義を考えるか、それとも狭い意味



での定義を考えるかという問題があり、それによって、何をユートピアと呼ぶかは、かなり異なってくる。ユートピアを人間性に備わる普遍的現象と考える者は、当然できる限り広い意味で理解しようとするはずである。<sup>(14)</sup> 例えば、希望に関する百科事典と称せられるエルンスト・ブロッホの『希望の原理』では、「未だ成らざる可能性に対する、期待、希望、志向」がユートピアの原理とされている。<sup>(15)</sup> 最近では、最も包括的な定義を示しているのは、ラス・レヴィタスであり、彼によれば、「ユートピアとは、より良い生活の仕方を求める願望の表現である」。<sup>(16)</sup>

このような定義は確かに、多くのユートピアを包括しても、逆にすでに述べたように、ユートピアと他の「よりよい生活の仕方を求める」ものとの区別を失わせてしまうように思われる。つまり、このような定義をする者は、ユートピアは西洋に限らず、あらゆる時代に、そして、あらゆる民族、国家、社会に存在すると主張するであろう。そのため、例えば、黄金時代、アルカディア、千年王国、桃源郷、常世の国、浄土などもユートピアとみなすか、その一部と考える。実際に、日本のユートピアを論じる多くは、桃源郷のイメージでユートピアを語っている。もちろん、その相違を理解した上で、その他の理想社会の類型をユートピアないしはユートピアニズムと呼ぶことは可能かもしれないが、私は混乱を避けるために、あくまでも別の言葉で呼ぶべきであると主張したい。

- (一) J. M. Patrick, 'Utopias and Dystopias, 1500-1750,' in *St. Thomas More: A Preliminary Bibliography of His Works and of Moreana to the Year 1750* compiled by R. W. Gibson (New Haven, 1961), p. 293.
- (二) L. T. Sargent, 'Political Dimensions of Utopianism with Special Reference to American Communitarianism,' in *Per una definizione dell' utopia* a cura di N. Minerva (Ravenna, 1992), p. 194.
- (三) F. E. & F. P. Manuel, *Utopian Thought in the Western World* (Cambridge, Mass., 1979), p. 5.
- (四) *Ibid.*, p. 336.
- (五) L. T. Sargent, 'Is There Only One Utopian Tradition?' *Journal of the History of Ideas*, vol. 43(1982), p. 689.
- (六) B. Bacsko, 'The Shifting Frontiers of Utopia,' *Journal of Modern History*, vol. 53(1981), p. 469.

- (7) Cf. W. E. Connolly, *The Terms of Political Discourse* (Oxford, 1983 [2nd ed.]), pp. 10ff.
- (8) 拙稿『ニュー・アトランティス』とルネサンス・ユートピア』花田圭介編『フランシス・ペイコン研究』（御茶の水書房、一九九三年）、一三六頁。
- (9) この直接的ヒントは、J. C. Davis, *Utopia and the Ideal Society: A Study of English Utopian Writings 1516-1700* (Cambridge, 1981) や M. Eliav-Feldon, *Realistic Utopias: The Ideal Imaginary Societies of the Renaissance 1516-1630* (Oxford, 1982) から得ているが、定義や図は私独自のものである。
- (10) K・マンハイム『イデオロギーとユートピア』（『世界の名著』五六）高橋徹・徳永恂訳（中央公論社、一九七一年）、三〇九頁。なお、「現に存在するものすべてを何もかも正当化しようとする」（二三三頁）保守主義もユートピア意識に含めている点も納得できない。
- (11) R・マンフォード『ユートピアの系譜』関裕三郎訳（新泉社、一九七一年）、一〇頁以下。
- (12) J・セルヴィエ『ユートピアの歴史』朝倉剛・篠田浩一郎訳（筑摩書房、一九七二年）、特に、二八〇頁以下。
- (13) 拙著『ユートピアの政治学』（新曜社、一九八七年）、四章参照。
- (14) 欧米のユートピアの定義に関して、田村秀夫「ユートピア概念の形成」『経済学論纂』（中央大学）、第三四卷第二号（一九九三年六月）、一―三六頁が主體的契機と客観的（制度的）契機とに大別している。私の定義はその点では後者になろう。
- (15) E・プロッホ『希望の原理』山下肇他訳（白水社、一九八二年）、第一卷、二二頁。
- (16) R. Levtas, *The Concept of Utopia* (London, 1990), p. 8.

3

まず、歴史的にみて、ユートピアには変化があるかを考えたい。ユートピアを好意的に考える者も、批判的に考える者も、しばしばそれがほとんど同じ内容であり、基本的には何の歴史的变化もないと主張している。しかし、歴史的变化を認める者もいる。例えば、古代と一六世紀以後とに分けるM・I・フィンレヤ、一六世紀までの「古典的ユートピア」と一七世紀以後の「近代的ユートピア」とに分けるエリザベス・ハンソットがいる。<sup>(1)</sup> その場合、私の関心

からいえば、問題となるのはモアの『ユートピア』をどのように位置づけるかである。フィンレイによれば、それは新しいユートピアの始まりであり、ハンソットによれば、プラトンの『国家』以来の「古典的ユートピア」になる。つまり、『ユートピア』はユートピアという伝統に革新をもたらしたのか否なのか。

この間は奇妙なものである。ユートピアという伝統に革新をもたらしたところか、この言葉自体を作り出したのがモアの『ユートピア』ではなかったのか。私は少なくとも、『ユートピア』という作品を無視して、ユートピアを論じることができないと考えている。<sup>(2)</sup> とりわけ、『ユートピア』に対する解釈が現在かなり変化しており、ユートピア一般に対しても再考が迫られているからである。<sup>(3)</sup> ただ、言葉や作品というものはそれを作り出した者の手を離れるために、ユートピアの意味や形式をモアが考えたものだけに限定することもできないとも考えている。

この点で最初に考えたいのは、『ユートピア』以前のユートピアの存在である。一般的には、古代ギリシャにおいても、ユートピアが存在していたと主張されている。<sup>(4)</sup> ただその際、注意したいのは、すでに述べた理想社会論の他の類型との混同がしばしば見られることである。<sup>(4)</sup> しかし、プラトンの『国家』に関しては、とりわけ『ユートピア』への影響もあり、私自身もすでに、先の定義には『国家』も含まれると述べておいた。ただ、『国家』よりも、より具体的にアトランティス社会や古いアテネ社会を描いた『ティマイオス』や『クリティアス』の方がユートピア作品であるとみなすこともできよう。しかし、いずれにしても、ルネサンス・ユートピアはプラトン主義の強い影響下にあると考えることができる。<sup>(5)</sup>

近代のユートピアに関しては、ここでは十分な用意はできていないが、プラトン主義の影響があるとしても、基本的には啓蒙主義的ユートピアと考えたい。<sup>(6)</sup> 私はすでにベークンの『ニュー・アトランティス』にその傾向が認められることを指摘しているが、啓蒙主義的な進歩思想と結びつくことによって、未来に理想的社会が実現できるという楽天主義がユートピアに影響を与えてくる。

この点では、未来社会にユートピアをおいた最初の作品といわれている、ルイス・S・メルシエの『二四四〇年』（一七七一年）は、明らかにベーコンや啓蒙思想の影響が認められる。その未来社会には、何世紀にもわたる共同作業によって、自然の事物の収集や科学技術の成果をすべて陳列している「国王の陳列所」という建物があるが、その目的は次のようにいわれている。「われわれの目的は事物の秘密の運動を知り、人類の支配を拡大することである」<sup>(7)</sup>。これは『ニュー・アトランティス』のソロン館とその目的の模倣である。ただ、その社会では「人類の精神は、最も希で、最も力強い発見を、危険を伴わず使いこなせるような時代になっていない」とも考えられている<sup>(8)</sup>。

この点では、私が見たユートピア作品のなかで最も楽天的で、近い未来にその実現を確信していたのはエドワード・ベラミーの『顧みれば』（一八八八年）である。彼はその「あとがき」で、「黄金時代はわれわれのうしろにはなく、われわれのまえにあるのであって、しかも遠く離れてはいない、という信念から書かれた」と述べている<sup>(9)</sup>。この本は当時としては超ベストセラーとなったが、書評でその社会主義を「きわめて極端な中央集権化による国家社会主義」と呼び、「社会主義復興のバイブル」とみなすべきではないと批判したのがウィリアム・モリスであった<sup>(10)</sup>。

彼は別の社会主義ユートピアとして『ユートピアだより』（一八九〇年）を書いたが、そこでは楽天主義は薄れ、未来よりも、現在の闘争のなかで生きることの重要性が説かれている。ただ、形式的には、『顧みれば』と同様であり、未来により良き社会がおかれていることは変わりない。一般的には社会主義も啓蒙思想の進歩主義を継承していた。

しかし、二〇世紀になってから、進歩主義や楽天主義への懐疑が強まることによって、「反ユートピア」作品が多くなっていく。代表的作品は、E・H・ザミャーチンの『われら』（一九二〇一年執筆）、A・ハックスリーの『すばらしい新世界』（一九三三年）、G・オーウェルの『一九八四年』（一九四九年）である。いずれも、ユートピアないしはユートピア理論による理想社会の実現を「悪しき社会 dystopia」の実現として、戯画的に描いた物語である。その背景には、一九二四年に英訳で最初に出版され、他の作品にも影響を与えた『われら』がロシア革命の混乱期に書かれ、

その危険性を指摘しているように、社会主義国家の成立があるが、より一般的には個人の自由を抑圧する「ユートピア社会」に対する批判がある。<sup>(11)</sup>

このような反ユートピア作品だけではなく、ユートピアを全体主義的なものとして批判する社会理論も多い。そういう意味では、二〇世紀は「反ユートピア」の時代であると思われるかもしれない。とりわけ共産主義国家の解体によって、「ユートピアの死」の主張が勢いを増している。<sup>(12)</sup>しかし、依然として、肯定的なユートピア作品も書かれ、ユートピアを擁護する人も多い。

ただ、もともとユートピア作品のなかに、ユートピア批判が組み込まれているものもある。とりわけ風刺的傾向が強い作品は、その風刺が現実社会にのみならず、自らが作り出したユートピア社会にも向けられる。代表的作品としてS・パトラの『エレホン』(一八七二年)が一般的にいわれている。しかし、私自身はすでに『ユートピア』自体が、「理想社会」を一方的に提出している作品ではなく、風刺的要素も強く、どこまでモアの理想と考えていいのか、むずかしい「アイロニカル」な作品であると解釈している。

この点では「曖昧なユートピア」という副題をもつU・K・ル・グインの『所有せざる人々』(一九七四年)は興味深い。それはオドー主義という思想によって組織化されたアナレス星生まれの物理学者シェヴェックが、アナレス人の祖国であるウラスという星へ脱出し、また帰国するというSF小説である。アナレスは無政府主義的であり、「人間同士の連帯感と相互扶助の精神」に依存した社会であるが、気候風土のせいもあって、生活が貧しく、飢餓の危険性もある。しかし、シェヴェックがそこから脱出したのは、その社会では「みんな、没個性的で、人格をもって」おらず、「社会による糾弾を惧れる気持、異分子となることに対する惧れ、自由であることの不安」が強く、<sup>(13)</sup>そのため彼のような学者や芸術家は自由に活動できないと感じ、実際に活動できなかったからであった。これに対して、ウラスでは資本主義によって社会が運営され、活力に満ちあふれ、生活物資も豊かであるが、貧富の差が激しく、やがてシェヴ

エックはこの社会にも自由がないと思うようになる。アナレスでは「なにも所有していないからこそ自由なのです。ところがあなたがた「ウラス人」所有者は捉われている」。<sup>(14)</sup>

この作品では明らかに、アナレスの「理想主義」に共鳴が寄せられているが、しかし、その社会がさまざまな問題（まさに「反ユートピア」作品が批判する問題）をかかえていることにもふれられ、それが「永久革命」を必要としていることが語られている。また、時代としては遠い未来におかれているが、地球外の惑星を舞台としていることは、未来社会ではなく、むしろ『ユートピア』のように異空間にあり、現実的な社会である印象を与える。いずれにしても、このユートピアは未来での実現を迫るものではない。このような点で、ユーモアや風刺は少ないが、『ユートピア』を正當に継承する作品である。

- (1) M. I. Finley, 'Utopianism Ancient and Modern,' in *The Use and Abuse of History* (New York, 1971), pp. 178-192; E. Hansot, *Perfection and Progress: Two Modes of Utopian Thought* (Cambridge, Mass., 1974).
- (2) 澤田昭夫「ユートピアの定義のために」『アカデミア』人文・自然科学編、保健体育編、第二五集（一九七五年、三月）、一―二九頁はこの点を強調した定義である。
- (3) 拙稿「レトリックとしての政治思想史」『思想』、第七四五号（一九八七年、四月）、八四頁以下参照。
- (4) J. Ferguson, *Utopias of the Classical World* (London, 1975) に於て、そのような混同がみられる。この点では、最近 D. Dawson, *Cities of the Gods: Communist Utopias in Greek Thought* (Oxford, 1992) は、Ferguson を批判し、またそこではふれられていなかったストア派や犬儒派の共産主義ユートピアを詳細に論じている。なお、中世に関しては、私の考えるようなユートピアは存在しないようである。 Cf. G. Zaganeli, 'Utopia medievale,' in *Per una definizione dell'utopia*, op. cit., pp. 61-70.
- (5) M. Goldie, 'Obligations, Utopias, and Their Historical Context,' *The Historical Journal*, vol. 26 (1983), pp. 740ff. 注、ホーロコットの「エキマヴェリマン・コメント」のようだが、近代初期のユートピアに対するプラトンの影響に関して成立するところ。
- (6) J・N・シユクラール『ユートピア以後』奈良和重訳（紀伊國屋書店、一九六七年）は、啓蒙主義の没落とユートピアの

衰退をほぼ同一視している。

- (7) L. S. Mercie, *L'an deux mille quatre cent quarante* (London, 1772), p. 248.
- (8) *Ibid.*, p. 260.
- (9) E・スラミール『かえりみれば』(『アメリカ古典文庫七』) 本間長世訳(研究社、一九七五年)、二九五頁。
- (10) W. Morris, *News from Nowhere and Other Writings*, (London, 1993 [Penguin books]) p. 356, 358.
- (11) 拙稿「ユートピアの終焉と政治思想の未来」『モダンとポスト・モダン——政治思想の再発見』(木鐸社、一九九二年)一三三頁以下でこれらの作品の比較をしている。
- (12) K. Kumar, 'The End of Socialism? The End of Utopia? The End of History?' in *Utopias and the Millennium* ed. by idem and S. Bann (London, 1993), pp. 63-80 は「このような傾向を批判的に扱ってこそ」。
- (13) U・K・ル・グイン『所有せざる人々』佐藤高子訳(ハヤカワ文庫、一九八六年)、四二二、四二九頁。
- (14) 同、二九七頁。

4

歴史的には、このように空間から時間(未来)へ、さらに空間への回帰が認められるのではないかというのが私の仮説である。いずれにせよ、ユートピアには、様々な種類が考えられ、いくつかに分類をする必要があるかもしれない。ただ、この場合でも、広義の意味での「ユートピア」に含まれるものはごく必要がある。<sup>(1)</sup>

私はフィクションとしての文学形式のユートピアを基本と考えているが、一般的にはユートピアの実践やユートピア理論の存在も指摘されている。そのため、ユートピアの活動を、「文学としてのユートピア」(ユートピア文学)、「実践としてのユートピア」(ユートピア実践)、「理論としてのユートピア」(ユートピア理論)とに分類し、それぞれについて考えていきたい。

まず「文学としてのユートピア」であるが、確かに文学ジャンルとしてのユートピアの伝統は現在まで続いている。

一般的に文学史家は、当然のことに、フィクションとしてのユートピアのみをユートピアと考える傾向がある。その形式は基本的には、ある旅行者が見聞した、現実から遠く離れた空間に存在するという架空の優れた社会が物語られるものである。すでに述べたように、近代になってからユートピアが遠く離れた「空間」の代わりに「時間」に、とりわけ、未来におかれることが多くなっているが、形式としては同じであり、ユートピアは「架空の旅行記」ということになる。そのためもあってか、SF史家、ダルコ・スーヴィンによれば、「ユートピアはひとつの独立したジャンルではなく、サイエンス・フィクションの社会政治的サブジャンルということになる」<sup>(2)</sup>。

私は政治学からみても、「文学としてのユートピア」は重要であり、基本であると考える。最も狭義のユートピアはこのユートピアで十分であろう。ただし、その形式を狭く限定する必要もない。「形式的には虚構的空間に設定された全体的かつ具体的な像」を示すものであれば、別の形式でもよいと考える。例えば、私が考えているのは、プラトンの著作、『国家』よりもむしろ『法律』<sup>(3)</sup>である。逆に、たんに形式だけ虚構的体裁をとっても、内容は政体論や憲法案と変わらないものもあり、注意が必要である。例えば、ハリントンの『オセアナ共和国』は、憲法草案とみなすこともできるかもしれない<sup>(4)</sup>。

文学としてのユートピアには、私が以前から主張してきた「レトリック」としての重要性がある。「人は像あるいは具体的記述によって説得しようとする。私はこのような政治的説得を用いるユートピア的な試みを思考実験と呼ぶが、このような議論は、メタファーやアナロジーあるいは過去や未来を虚構として再構築する形態で、政治的著作には広く認められる」<sup>(5)</sup>。つまり、たんに理論として、より良い社会を記述するのではなく、それを細部にわたって、具体的に、可視的に記述することは、政治的效果が高いということである。ユートピアが危険だとしたら、レトリックが危険だからである。ただ、それは「思考実験」であり、「どこにもない場所」という虚構性が意識されていることも重要である。



この点で、次に「実践としてのユートピア」を考えたい。そのさい、まず「都市計画」の問題をとりあげたい。というのも、マンフォードによれば、古代都市がユートピアの原型であり、ユートピアの起源として、理論と実践がからみあった「都市」の問題が存在するからである。<sup>(6)</sup>つまり、ユートピア文学が現実の都市をモデルとするとともに、古代からの多くのユートピア文学や建築家が描く理想都市論も現実化されているという。例えば、ルネサンス・ユートピアの始まりとして、『ユートピア』以前の一五世紀から一六世紀にかけてのイタリア都市計画論の存在を指摘する者があり、しかもそれらは「理想都市論」であるとともに、現実化が図られ、実現したものもある。<sup>(7)</sup>

しかし、「理想都市論」は、円形、正方形、星型のような幾何学的な都市計画論などの点で、多くのユートピア文学に影響を与えたとしても、後者が対象とするのはそれだけではなく、あくまでも社会生活全体である。さらに、「理想都市論」は、ふつうのユートピア文学よりも、対象が限定されるだけ、後者よりも実現性は高いといえる。つまり、「理想都市論」は「文学としてのユートピア」とはいえないと私は考える。しかも、現実化された都市計画は、完成されたものであれば、もはや「実践としてのユートピア」とはいえない(都市計画ではないが、ガウディのサグラダ・ファミリア教会はユートピアといえるかもしれない)。ただ、西洋の理想都市論や都市計画には、ユートピア理論としてのプラトン主義の存在を指摘でき、その点ですでに述べたようなユートピアとの共通性があるのかもしれない。

ほぼ同様のことは、いわゆる「ユートピア共同体」についても、私は主張できるところと思う。最も数多く「ユートピア共同体」が実現したのは、一九世紀のアメリカ合衆国においてであるといわれている。<sup>(8)</sup>それらは、大別すると、オーウェン主義者やフリーエ主義者、イカリア主義者などのいわゆる「ユートピア社会主義者」によるものと、ラップ派、ゾアル分離派、アマナの真の靈感の会、オナイダ完全主義者などの宗教的セクトによるものが考えられる。しかし、これらのうちで、「文学としてのユートピア文学」をモデルとするのは、エティエンヌ・カベの『イカリア航海記』(一八四五年)に基づくイカリア主義者の共同体だけである。後でも述べるように、「ユートピア社会主義者」による共同体

であるからといって、直ちに「ユートピア共同体」と呼ぶことはできない。宗教的セクトによるものは、当然のこと  
にユートピア的ではなく、千年王国的である。<sup>(9)</sup>つまり、彼らは社会制度には関心が薄く、地上に楽園を実現して  
いないしはできると信じている。

いずれにしろ、一般的に、「ユートピア共同体」と考えられているもの多くは、むしろ「千年王国」に基づく実践  
である。ただ、イカリヤ共同体を除いても、いわゆる「ユートピア共同体」で実現したものと、「文学としてのユート  
ピア」で描かれた社会との類似は確かに存在する。もちろん、後者が間接的に前者に影響を与えたことも考えられる  
が、逆に「千年王国」のユートピア文学に対する影響も考えられよう。「千年王国」実践と区別されるユートピア実践  
があるとしたら、それは「行動実験としてのユートピア」として、つねに未完の運動として存在するしかないと思  
考えている。

最後に、「理論としてのユートピア」であるが、まず、ユートピアが特定のイデオロギーと結びつくとしても、それ  
を特定のイデオロギー、とりわけ社会主義と同一視はできない。確かに、『国家』や『ユートピア』では共産主義が描  
かれ、その後のユートピア文学でも、社会主義を採用するものが多く、そのようなユートピア文学を評価してきたの  
も社会主義である。しかし、共産主義や社会主義を採用しないユートピア文学も多い。<sup>(10)</sup>

この点で「ユートピア社会主義」の問題を考えたい。わが国の社会科学では、いぜんとして、それがユートピアな  
いしはユートピア理論と同一視されるか、あるいはその代表的存在と考えられている。しかし、その主唱者と言われ  
るロバート・オーウェン、サン・シモン、シャルル・フーリエは、「ユートピア文学」を書かず、しかも自らの構想の  
実現性を信じ、非現実的な理論と呼ばれることを好んではいなかった。例えば、オーウェンは『社会に関する新見解』  
(二八―三年)の序文で次のようにいう。「このように新しくしかも一風変わった実践を提案する者は、現代の空論家、  
夢想家」というレッテルをはられるかもしれないが、「こういう非難は、あらゆることを表面だけしか見ない人たちが

すぐに口にする叫びである。<sup>(11)</sup>

それにもかかわらず、彼らが非現実的な空論家、観念的な夢想家という意味でのユートピア社会主義者と呼ばれたのは、もちろんマルクス主義によってである。しかし、「主観的」には自らを非現実的とは考えていない理論までを、ユートピアと呼ぶためには、「客観的」基準となる理論がなければならない。もちろん、それはマルクス主義であり、当然その理論は客観的であり、現実的であると自らを主張する。しかし、そのような基準が存在するのであろうか。実際、最近では逆にマルクス主義をユートピアニズム、あるいは千年王国主義と呼ぶ傾向が強まっている。いずれにせよ、私のいいたいのは、理論としての社会主義ユートピアは存在しても、ユートピア社会主義というものは存在しないということである。

次に、一般的な政治理論とユートピアの関係について少し考えたい。政治の概念や理論の多くは規範的であり、「フィクション」である。J・C・デーヴィスは次のようにいう。「すべての政治哲学は、フィクションとして「主権」や「弁証法」、「一般意志」、「権力分立」、「世論」、「共通善」を取り扱う。フィクションはユートピア作品の属性とみなしうるが、それはフィクションがあらゆる政治の理論化の属性であるというのと同じ意味においてのみである。<sup>(12)</sup>」。

同様に、政治理論も、現実のあり方をそのまま認めるものは少ない。例えば、現実主義的といわれるマキアヴェリ『君主論』であっても、その終章、第二六章に見られるように、イタリアの統一と解放という彼の「理想」が存在し、しかもその「理想」は二十世紀まで完全には実現はせず、そういう意味では、まさに「非現実的な」フィクションであった。モアの『ユートピア』もすでに述べたように現実主義的要素を持っている。もちろん、だからといって、私は多くの政治理論をユートピア理論と呼びたいのではない。

私がいいたいのは、現実的か否かで、ユートピアか否かを分けることは、無意味であるということである。実際、「自然の楽園」としての理想社会を述べる政治理論はほとんどありえないのに対して、「ユートピア」としての理想社

会を述べる政治理論は多い。すべてが善人である社会ではないために、権力による強制をまったく排除できないユートピアは、自然の楽園よりは「政治的」であり、「現実的」である。

それでは、理論としてのユートピアの特徴は何であろうか。クリシャン・クマーは、フィクション、文学としてのユートピアと「ユートピア理論」を区別するが、両者の共通性として、「人間性は完全性に向かいうるという信念」を考えている<sup>(13)</sup>。しかし、ユートピア文学で描かれた社会は、決してすべてが完全な社会とも、完全な社会に向かうとも考えられてはおらず、まして完全な人間性を前提とするものとも思われない。この点はしばしば誤解され、ユートピア批判の大きな根拠となっている。アイザー・バーリンは「完全な社会という思想」とユートピア思想を同一視し、その危険性を指摘している<sup>(14)</sup>。

私は、ユートピア文学よりは虚構性が少なく、生活の細部を描かないが、比較的、具体的な実験的制度が展開されているものをユートピア理論と考えたい。この場合の「実験的」とは、その時代の一般的水準を越えて、風変わりと思われているものをさす。例えば、ウィンスタンの『自由の法の綱領』は、形式的にはその実現性が信じられた政体論ないしは憲法草案であり、ユートピア文学に含むことはできないが、ユートピア理論には含むことができるかもしれない。彼はクロムウェルにあてた序文では「一見すればこれは奇妙な政府であるとあなたはいちつかもしいない。しかし、実行する前に判断しないで欲しい」という<sup>(15)</sup>。また、「ユートピア社会主義」はこの点では、ユートピア理論と呼ぶことはできるであろう。

あくまで暫定的にすぎないが、私の定義を提出したい。ユートピアとは「不在の現実的理想(社会)」である。「文学としてのユートピア」とはそれを「具体的な虚構空間や時間に描く思考実験」であり、「実践としてのユートピア」とはそれを「現実空間に求め続けようとする行動実験」であり、「理論としてのユートピア」とはそれを「現実空間を越えて実現させようとする制度実験」である。

- (1) 私が見たなかで、最も多彩な分類は、L. T. Sargent, 'Political Dimensions of Utopianism with Special Reference to American Communitarianism,' *op. cit.*, pp. 185-210. であるが、広義のユートピアに当てはまる。
- (2) D・スーヴィン『SFの変容』大橋洋一訳(国文社、一九九一年)、一一四頁。
- (3) 私はすでに『ユートピア』が『国家』よりも『法律』に近く、レトリック的であることを指摘している。『ユートピア』と『法律』、『トマス・モア研究』第七号(一九七六年)、二〇―二九頁。
- (4) M・L・ベルネリ『ユートピアの思想史』手塚宏一・広河隆一訳(太平出版、一九七二年)、二五〇―二頁参照。ただ憲法草案をユートピアとみなす論者もいる。ベーター・ハーベルレ『立憲国家の文献ジャンルとしてのユートピア』井上典之訳『大阪学院大学法学研究』一九巻(一九九三年、十二月)、五七―八二頁。
- (5) Hansot, *op. cit.*, p. 5
- (6) L. Mumford, 'Utopia, the City and the Machine,' in *Utopias and Utopian Thought*, ed. by F. E. Manuel (Boston, 1967), pp. 10ff.
- (7) E. Garin, 'La cité idéale de la Renaissance Italienne,' *Les Utopies à la Renaissance*(Bruxelles, 1963), pp. 13-37. 同様のことは、フランス革命期や一九世紀にもいえるようである。B・バチコ『革命とユートピア』森田伸子訳(新曜社、一九九〇年)、第六章、月尾嘉男・北原理雄『実現されたユートピア』(鹿島出版会、一九八〇年)等参照。中国古代都市でも、大室幹雄は「アルカディア複合(大同コンプレックス)」から区別された「ユートピア複合(小康コンプレックス)」という、より都市的であり制度的な概念を使って、現実の都市と理想社会論との関連を語っている。『劇場都市―古代中国の世界像』(三省堂、一九八一年)。
- (8) とりわけ、最も盛んであった一八四〇年代に関して、濱田政二郎『ユートピアとアメリカ文学』第三章参照。
- (9) 倉塚平『ユートピアと性―オナイタ・コミュニティの複合婚実験』(中央公論社、一九九〇年)、第一章参照。
- (10) 例えば、最近出版された、これまで論じられることが少なかった一八世紀イギリスのユートピア作品のアンソロジー、*Utopias of the British Enlightenment*, ed. by G. Claeys (Cambridge, 1994) にある七つのユートピア作品のうちで、明確に共有制をとるものは一つもない。
- (11) オーウェン『社会にかんする新見解』(『世界の名著』続八)坂本慶一訳(中央公論社、一九七四年)。
- (12) J. C. Davis, *op. cit.*, p. 17.

- (13) K・クマー『ユートピアニズム』菊池理夫・有賀誠訳（昭和堂、一九九三年）、四七頁以下。  
(14) I・バーリン「西欧におけるユートピア思想の衰退」河合秀和訳、『ロマン主義と政治』（岩波書店、一九八四年）、一一四―一頁。  
(15) *The Works of Gerrard Winstanley*, ed. by G. H. Sabine (New York, 1941), p. 512.

5

以上の私の定義は、ユートピアないしはユートピアニズムへの批判の根拠を否定するためのものでもある。まず、それが現実的である点で、たんなる夢物語や逃避ではない。逆に、現実化されないことを意識している点で、それは完全性を求めるものではなく、人々を強制するものでもない。もちろん、私には形容矛盾と思われる「実現されたユートピア」が危険な要素をもつことは否定しない。

それにしても、人はなぜ、肯定するにせよ、否定するにせよ、ユートピアに関して徹底性を求めるのか。しばしば、ユートピアは紋切り型で、単調で、個性に乏しいという批判がなされる。しかし、ユートピアを否定する方も同様なことがいえないであろうか。ここでは、すべての理想社会が同じ性格をもつかのように語られる。私には、ユートピアのもつ逆説的、アイロニカルな性格が理解されていないように思われる。

確かに現在では、ユートピアやそれと関連するプラトン主義や啓蒙思想への批判は当然かもしれない。しかし、日本には逃避的な理想社会論や現実に存在するものを理想化する「神話」以外のユートピアは存在したのだろうか。日本にはユートピアの終焉は存在しない。もともとユートピアは存在しないのだから。

しかし、例えば「国民主権」や「民主主義」は、どのように定義されようとも、完全なものとして、現実に存在しているのではなく、「どこにもないもの」であり、ある望ましいあり方が前提とされている。つまり、それらは絶えず

「ユートピア」として求めていかなければならないのではないだろうか。